

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19730347  
 研究課題名（和文）男性介護者の実態に関する質的調査研究 家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス  
 研究課題名（英文）Qualitative Research on situation of male caregivers: Interface of Family, Care and Gender  
 研究代表者  
 齋藤 真緒（SAITO MAO）  
 立命館大学・産業社会学部・准教授  
 研究者番号：70360245

## 研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、増加し続けている日本の男性介護者を取り巻く介護実態および家族関係について、質的調査研究を通じて明らかにするものであった。量的および質的調査を通じて、家事をめぐる困難、仕事との両立をめぐる困難、暴力的行為等、男性介護者固有の課題を解明した。これを踏まえ、男性介護者への支援プログラムの開発に向けて、まず、全国各地で行われている男性介護者支援活動（集いの開催）に参加観察を行い、男性の組織化の現状について分析した。さらに、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」の設立に参画した。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this qualitative research is to reveal the reality and familial relationships of male caregivers, who have been continually increasing in Japan. I have clarified male caregivers' difficulties such as house work or compatibility with paid work, and the tendency of abusive behavior through quantitative and qualitative researches. By considering of these results, I committed to develop the supportive programs for male caregivers. First, I investigated the supportive group activities for male caregivers in several parts in Japan, in order to find the ways how to organize them. Second, I attended to construct the "Male caregivers and supporters National wide network".

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	450,000	3,350,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ケア、ジェンダー、男性介護者、家族介護、介護者支援、男性性

## 1. 研究開始当初の背景

今回申請を行った研究課題は、増加し続け

ている男性介護者を取り巻く介護実態および家族関係について、質的調査研究を通じて明

らかにするものであった。男性介護者の量的増加は、家族介護の現状と課題を明らかにする上でのひとつの重要なメルクマールではあるが、介護殺人や高齢者虐待の現状、すなわち、介護保険制度導入後も介護殺人が400件以上発生しており(2000-2009年)うち加害者の7割を男性が占めるという現実に照らしても、自動的にジェンダー平等を達成しえない。つまり、男性介護者が介護役割を遂行しやすい社会環境を創造するためには、男性介護者が抱える困難を解明し、それを解消するための社会的支援が必要となるという現状認識のもとに、本研究に着手した。

## 2. 研究の目的

男性介護者研究は、ジェンダー研究、ケア研究、および家族研究という三つの研究領域のインターフェイスに位置づけられる。

(1) これまで女性が介護の主たる担い手として位置づけられており、介護研究も女性を焦点化する傾向にあったので、男性介護者はあくまでも「例外」として取り扱われており、その実態は依然として明らかにされていない。本研究では、まず男性介護者の介護実態を量的および質的調査を通じて解明することを第一義的な課題として設定した。

(2) 男性介護者の介護にかかわる「主観的現実」を、インタビュー調査を通じて明らかにすることを第二の目的とした。男性介護者に対する支援プログラムの開発という観点からも、暴力的言動に至る/至らないプロセスやその規定要因を詳細に解明することは極めて重要であると考えた。

(3) 男性介護者を含む家族介護者を支援するための社会システムについての国際比較研究を第三の目的とした。

## 3. 研究の方法

研究の進め方とその構成は、先行研究レビュー(ケアとジェンダーに関する理論動向、男性性という観点からのケアや感情生活に関する理論動向、家族支援政策に関する国際比較研究)の他に、3つのカテゴリーから構成される。

(1) 男性介護者の介護実態に関する統計分析を行う。質的調査に向けた基礎作業として、申請者らが2006年度に実施した医療生協との共同調査データに基づいて、男性介護者の特性(年齢、家族関係、介護期間、介護負担、介護サービスの利用等)を、政府統計等との比較検討を行うと同時に、男性介護者固有の課題や困難について解明する。

(2) 男性介護者に対する質的調査(インタビュー調査)を通じて、男性介護者の介護を通じた家族関係の変容およびその過程における感情変容という「主観的現実」を明らかにする。質的調査のインタビュー対象者は、

2006年度に行ったアンケート調査において、個別のインタビュー調査への協力意思を示している男性介護者、および各地の男性介護者の集いに参加している男性介護者をその対象とした。さらに、研究当初は予定していなかったが、全国各地の男性介護者の集いへの参与観察を通じて、規模が小さい限定的な活動を活性化することを目的として、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」の立ち上げを企画し、その設立にもかかわった。

(3) 家族支援システムに関する国際比較研究を行う。2008年9月から1年間イギリスへの在外研究であったことも活かして、家族介護者支援プログラムが最も進展しているイギリスを中心として、EUにおける介護者支援施策の動向や歴史的変遷について検討を行った。また、日本の男性介護者の実態と課題についていくつかの国際的な学会や会議で報告することによって、日本の特徴と課題について検討した。

## 4. 研究成果

(1) 男性介護者の介護実態については、全国初の男性介護者に対する実態調査を実施した。男性介護者は主に、妻を介護する<夫グループ>と<息子グループ>に分類することができ、とりわけ<夫グループ>における高齢男性介護者の存在が明らかになった。また60代には<夫グループ>と<息子グループ>とが併存しており、60代が二重介護の可能性と同時に、介護関係の分岐点となっている。とりわけ高齢男性介護者を中心として、介護者自身の健康問題や、仕事との両立の困難(介護離職)、家事(炊事、洗濯、買い物)における困難、地域における孤立傾向が確認された。これらの調査結果は、男性介護者に対するジェンダーセンシティブな支援プログラムの開発の重要な手がかりとなる。特に注目すべき調査結果は、介護に対する負担と満足度の関係である(表1参照)。

表1 介護の負担感と喜びのクロス表(n=292)

	喜びを感じない	喜びを感じる
負担だと感じない	28(9.5%)	30(10.1%)
負担だと感じる	80(27.1%)	154(52.2%)

出典：津止・斎藤、2007:62頁を加筆修正

たしかに、介護に喜びを感じることはできず、負担館のみを感じている介護者も4分の1以上存在するが、マジョリティは、負担と喜びを同時に感じる介護者である。この感情の両義性と葛藤こそが、家族介護の特徴であり、支援の際に配慮しなければならない点である。

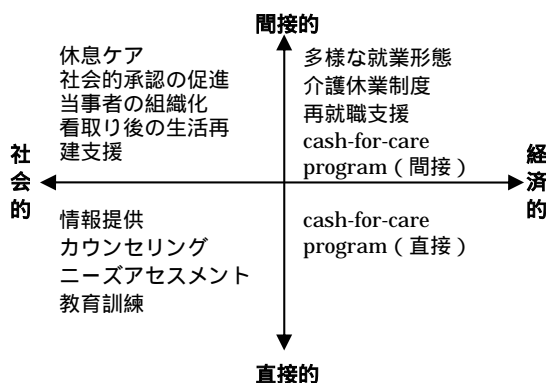
一連の量的研究は『男性介護者白書 - 家族介護者支援への提言』(共著、2007年、かもがわ出版)としてまとめ、いくつかのテレビ

番組にも取り上げられ、また「2008年度生協総研研究賞特別賞」を受賞した。

(2) 介護に喜びを感じる積極的側面と、負担感に圧倒される消極的側面とが共存・混在しているその「同時性」を、今日の男性介護者がおかれているポジショニングとして捕捉し、このスペクトラムにおける男性介護者の「主観的現実」に注目し、インタビュー調査および男性介護者が執筆した手記の分析を行った。介護は、愛情や感謝あるいは恩返しといった感情だけではなく、常に不安やいらだち、あるいは諦めや絶望という相対立するベクトルの感情を同時にもたらしている。このことは、家族が愛情という強い肯定的感情の裏返しとしての怒りという否定的感情と常に表裏一体になって振り子のように揺れ動く親密な人間関係特有の感情に起因する。本研究では、家族介護固有の感情の変化を、「両義的感情経験」としてとらえ、初動期から看取りまでの介護プロセスに即した介護感情の変遷を分析した(図1参照)。介護の動機づけとしての「愛情」の強度や自らの介護役割受容の成否、被介護者との関係に直接影響を及ぼす。このことの否定的影響が、被介護者に対する暴言や暴力である。介護のやりきれなさが、被介護者に対する怒りとして向けられる。怒りのコントロールは極めて難しく、実際に暴力をふるったり、首に手をかけてしまったりするケースもあった。しかし、暴言や暴力の後に介護者に到来するのは、さらに肥大化する苦悩であり「自己嫌悪」であった。暴言・暴力が発生する文脈を丁寧に理解することは、虐待や殺人予防対策という観点からも重要である。また、本研究では、こうした暴力的言動を克服した要因として、「情報・知識」、「支援者の存在」、「被介護者の立場・気持ち」が重要な役割を果たしたことを解明した。

(3) 家族介護者支援プログラムの国際比較研究としては、主にイギリスの家族介護者支援政策を中心としたEUの現状を整理した(支援のバリエーションについては、図2を参照)。

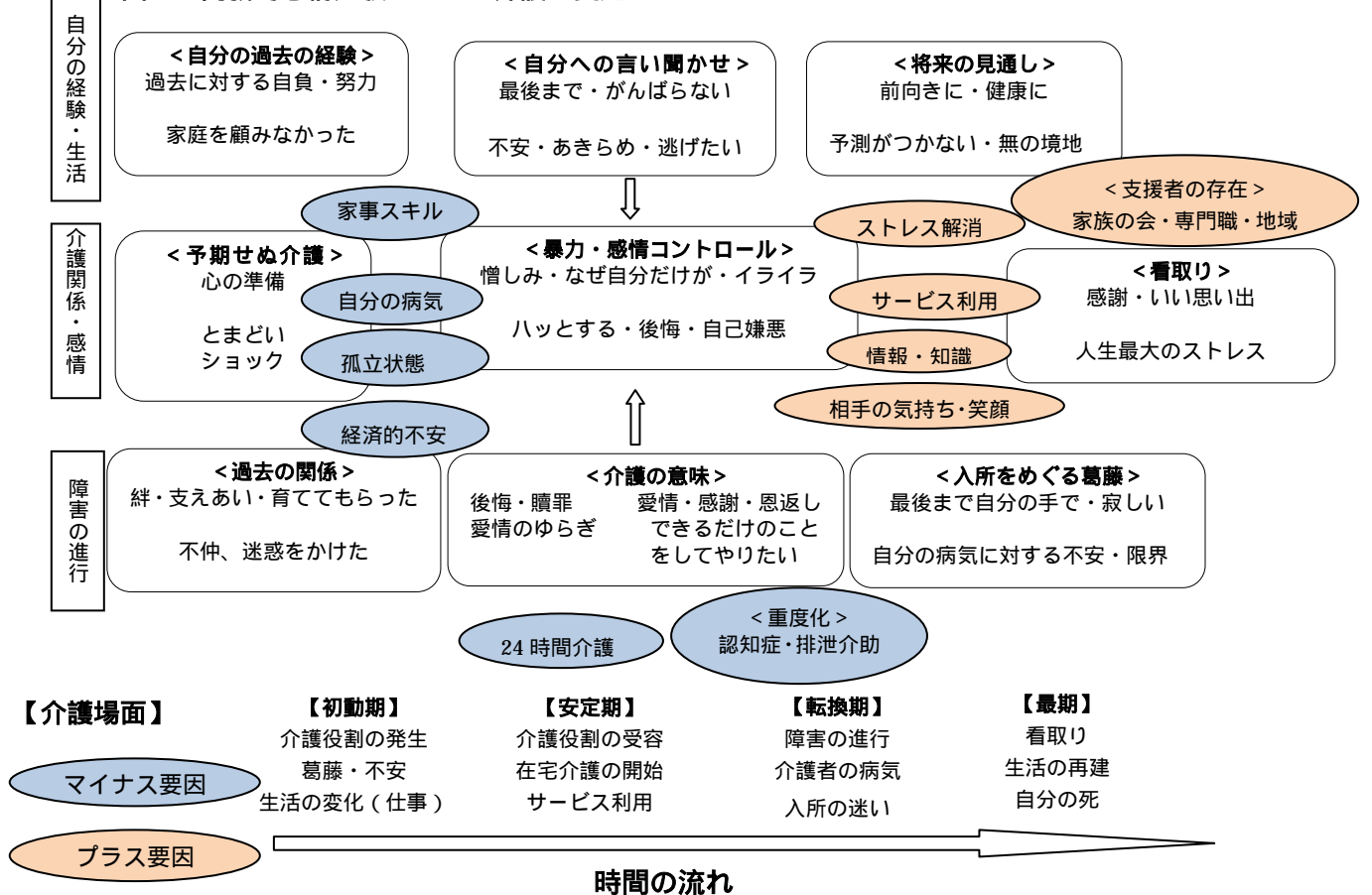
図2 家族介護者支援政策のスキーム



イギリスの家族介護者支援の変遷をみると、1980年代から本格化した「介護者運動」の存在と影響力の重要性が明らかになった。また、介護者支援の論理としては、介護者は介護労働ゆえに、労働市場を中心として社会的立場が極めて脆弱にならざるを得ないがゆえに、介護者を支援することは社会的課題であるというKittayによる「Douiliaの原理」をその論拠として参照している場合が多いことが明らかになった。このことは、ケアとジェンダーの新しい理論的地平として、今後さらに深めるべき課題である。また、とりわけ男性介護者支援という観点から、ケアと男性性(マスキュリティ)に関する理論動向を分析した。男性による援助を求めようとしない行動様式の解明や、年齢に応じた支配的男性性の形態の変化など、重要な論点が含まれていることが明らかになった(斎藤、2009にまとめ)。

(4) 男性介護者に対する具体的な支援方法として、東京、長野、福岡、宮城といった各地ですでに実施されている、男性介護者の集いの参与観察を行った。従来の女性中心の家族介護者の集いは、場を設定するだけで、参加者の女性同士が介護のみならず、いろいろな会話が展開するのに対して、男性介護者の場合には、学習会などの情報・知識収集型など、感情的交流ではなく、具体的な活動目標が明確化されている場合が効果的であることが分かった。また、アルコールを活用したり、集う場所を工夫したり(銭湯など)などの支援形態も確認された。研究開始当初は予定していなかったが、各団体調査を行う過程において、どの団体も会員の拡大や運営方法に苦慮しており、他団体の情報を欲していた。こうした意向を踏まえ、各団体に呼びかけ、2007年から1年間準備会議を定期的開催し、2008年3月に「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」結成集会を開催し、150名の会員から活動が開始した。1周年を迎えた2010年4月現在では、会員は400人まで拡大した。会報の発行、手記の募集及び発行、HPの活用など、全国各地に点在する男性介護者を、横断的につなぐ取り組みを行うと同時に、既存の団体以外の地域での、男性介護者の集いを企画運営している。男性介護者の介護環境を抜本的に改善すべく、男性介護ネットを中心として当事者の声を組織化し、介護保険制度を含む介護政策における家族介護者支援に対する社会的・政治的発信につなげていくことが今後の重要な課題である。3年間の研究を振り返ると、質的調査研究から、当事者の組織化や社会的な情報発信を含む「アクションリサーチ」という性格を強めるものとなった。研究の先進性・現代性・社会性という観点からみても、男性介護ネットの設立に関与できたことは、現場に徹底的に

図1 両義的感情経験としての介護の変遷



寄り添いながら考えるという、研究姿勢を獲得する上で極めて貴重な体験であったと言える。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)  
津止正敏・齋藤真緒、「家事にうろたえ、孤立に悩む夫たち、息子たち-全国調査データが示した“現実”」『論座』8月号、査読無、2007、261-268頁  
齋藤真緒、「男が介護するということ-家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス」『立命館産業社会論集』、査読有、第45巻第1号、2009、171-188頁  
齋藤真緒、「日本における男性介護者支援の課題-「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」の取り組みから-」『生活協同組合研究』、査読無、403号、2009、41-48頁  
齋藤真緒、「イギリスにおける家族介護者支援政策の展開」『comcom』、査読無、2010、48-50頁

〔学会発表〕(計4件)  
齋藤真緒、「男が介護するということ-家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス」、2007年9月8日、日本家族社会学会、札幌学院大学  
Mao Saito, Life Skill Difficulties Faced by Family Caregivers: New challenges faced by Japanese society as a result of the changing profile of family caregivers, in: International Conference on Transforming Elderly Care at Local, National and Transnational Levels Copenhagen (26-28 June 2008)  
Mao Saito, Transformation of informal care and gender: male carers in Japan, in: BSA Ageing, Body and Society Study Group Conference: Gender, Ageing and the Body, in The British Library Conference Centre (20th July 2009)  
Mao Saito, Fragile love? Male caregivers in Japan, in: the 18th Annual Conference on Men's and Masculinities: Growing Our Field: Emerging Perspectives on Masculinities and Men's Lives, in;

Georgia State University Atlanta,  
(26-28 March 2010)

〔図書〕(計1件)

津止正敏・斎藤真緒、『男性介護者白書：  
家族介護者支援への提言』かもがわ出版、  
2007、27-103頁、172-178頁

〔その他〕

ホームページ等

共著『男性介護者白書：家族介護者支援へ  
の提言』(かもがわ出版、2007年)が2008年  
度生協総研研究賞特別賞を受賞

(<http://www.co-op.or.jp/ccij/>)

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

斎藤 真緒 (SAITO MAO)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70360245